こんな最終回だったらいいのになぁ〜〜

M3

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
こんな最終回だったらいいのになぁ～～

【Ｎコード】
Ｎ１２５３Ｙ

【作者名】
Ｍ３

【あらすじ】
避けられなかったきたる日が来た……。高杉率いる“鬼兵隊”と天人の軍人勢力が、幕府・江戸の町々を狙う！かつての同志は何を思い、この戦いに終止符を討つのか？！

ギャグマンガのシリアスほどおいしいネタはない（前書き）

めちゃくちゃ難しいことに挑んでるなぁ～とは思ってます（「３「）
でもやりたかった！！
話が支離滅裂にならないよう、ゆっくり連載進めて行こうかと（笑）
なが～い目と気持ちで楽しんで下さい！！

ギャグマンガのシリアスほどおいしいネタはない

時がきた

この時を

待っていた

さあ行こうか

世界の終わりへ

すぐいきます

松陽先生

.
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.

「頭ぁ、お客ぜよ」

「ん？なんじゃ陸奥、わしにか？？」

宇宙にて、表から裏社会まで貿易の幅を広げる星間貿易業“快援隊”。
その創始者であり、頭である元攘夷志士“坂本辰馬”は、部下である陸奥に声をかけられた

「面会の予定なんかあったか？誰じゃ？」

「さあの、なんせ名を名乗らん。だが、奴からは……なんだか危険なかおりがした。帰ってもらった方が、わしはいいと思う」

「ん～～～。困ったの～～～……外見は？」

「派手な着物に煙管をくわえ、左目に包帯を巻いた男じゃ」

「お？それはもしかしたら……」

ギャグマンガのシリアスほどおいしいネタはない（後書き）

高杉ラブなので、私の理想となる結末で終わらしたい！だが……出来るかな（笑）

ギャグマンガのシリアスほどおいしいネタはない弐

「おお～！やっぱりおまんか！晋作～」

「……。」

「生きとったんか！いや～感動じゃの～晋作」

「…てめえも変わらねーな辰馬。」

「どげんかしたか？今日は」

「なぁに…ビジネスの話だ」

「せっかく久しぶりに再会したんじゃ！急ぎの用がないなら、一杯やらんか？」

「……。」

―――――――――――

「ククク…さすがは宇宙をまたにかける貿易会社の社長さんだな…いいもん食ってんじゃねーか」

「いやぁ～～あはは！わしはあまり食わん。どうも口に合わんからの～」

「そうかい……だがいいじゃねーか。……さぞうまいだろうよ。星空眺めながら呑む酒は」

「いや～～おまんには積もる話がたくさんあるぜよ！晋作。」

「……。」

「終結間近に姿見せなくなったときは死んだかと思ったぜよ」

「……。」

「あはは！まだおまんとこうして杯交わせるとはな！なぁ！晋作！」

「……晋助だ」

「ヅラと金時にはあったか？」

「……。会ってねーような面してるか？」

「そうか！あはは！わしも会ったが、変わっちょらんかったな～。ヅラも金時も」

「……どうだかな」

「あはは！おまんら、宇宙でもあまりいい噂聞かんぞ？！大丈夫か？」

「…ほお。どんな噂だ？」

「ヅラもおまんも、ずいぶん幕府のもんに噛みついて、表歩けんようになっとるちゅう話じゃ」

「辰馬ぁ…ヅラと一緒にされちゃ心外だぜ」

「あはは！そうか？すまんすまん。…ずっと宇宙にいると、地上のことがさ～ぱりでいけんの～」

「ククククク……しらばっくれんな辰馬。……宇宙(そら)からの眺めはいいもんだろ。」

「……。」

「……俺も最近、宇宙（そら）の散歩が多くてな。」

そう語りながら、高杉は煙管をもち、煙草を吸い始めた……

「……」

「江戸は……幕府は、天人に対して、どんどん懐を緩くしてくの～」

「なにを今更……奴らは、俺達がガキの時から天人に頭を垂らしてじゃねーか」

「……聞くが、おまんは、わしが憎いか？“晋助”」

「……。」

「晋助ぇ…わしは…もう分からんぜよ…江戸が、幕府が…。天人がどうとか、先のことじゃなきに……ただ、わし自身が…今の江戸に対してどう思っとるのかが…分からんようになった」

「……。」

「……あんな戦ば…無駄に仲間殺されにいくようなものじゃった…あの江戸の、町々の地の下には、わしらの仲間達の骨が……いまも眠っとる。…わしには、もう踏めん…あの地は。怖ぉうて…もう踏めん
けど……わしらの仲間を殺した天人は…あの地を踏む。仲間達の骨の眠るあの地を踏む……」

「……。」

「なぁ……晋助…おまんの言うとおり、宇宙からの江戸の眺めは最高じゃ……あの地を踏んでおらんだけで、わしは…仲間を殺した天人とも貿易交わしとる……おまんは、そんなわしが憎いと思うた時はなかか？」

「……。」

「わしも……銀時のように、変わりゆくあの町で過ごせる強さがあったら。……桂のように、己の信念を曲げず、町の変革を目指せる行動力があれば。……おまんのように…全てを壊すという野心のまま突き進めたら。……けどわしは、もう誰かが死んでゆく姿は…見とうない。
過去にも未来にも向き合えず、一番中途半端なのは……わしじゃき。
あはは！おまんらは、わしから見たらどいつもこいつも……格好良か侍じゃ」

「くそ真面目な顔して何を語り出すのかと思えば……クククッ。そんなことかい」

「ん？わし、なんか可笑しくなること聞いたか？」

「安心しな辰馬…俺ぁどっかの貿易会社の社長さんには興味はねー

よ」

「……。」

「だがな……。まぁ親切心で一言言っておくなら、ヅラや銀時…江戸に用があるなら……明日に済ませて、宇宙(そら)にいることだな」

「晋助…おまん、本当にやる気か？それで、本当にええのか？！」

「どいつもこいつも、何回言わせりゃあいいんだか。俺はただ、壊すだけだ……この世界を」

「おまんには、何が残る。晋助」

「……。」

「気持ちは分かる。わしは……止めんし、止める立場でもないじゃき。けど…仮に、天人も、幕府も、かつての友も…全て壊せたとして、おまんは…その後どげんする？」

「……。」

「……。」

「……。」

クククククッ

「？！」

「……辰馬ぁ…そんなの決まってんだろ

夜に黒猫が横切ると縁起が悪い

―万事屋―

「銀ちゃ～～ん！！定春が落ち着かないアル」

「ああ？」

「そうなんですよ。銀さん、定春…ここ2日間くらいなんだか忙しなくて」

「どーせただ糞してーだけじゃねーのか？ちゃんと散歩行かせてんのかよ」

「失礼アルな！ちゃんと行ってるョ！」

「いやなんかそういう落ち着きのなさじゃなくて……」

「銀ちゃ～～ん！！」

「おいっ！うっせーよ！定春！！何時だと思ってんだコノヤロー！
待て！伏せ！お座り！ちんちん！」

ワフッ！

あべしっ！！

「銀ちゃ〜〜ん！」

「銀さん！」

「いってえなてめえ！お主人様に何しやがんだ！」

「定春ぅぅぅ！！いい子だからお寝んねぇぇぇ！！」

「ったく…テレビ聞こえねーじゃねーか…」

『江戸の心臓と言っても過言でないこの“ターミナル！！”明後日で１０周年を迎えます！ターミナル周辺では、１０周年の感謝祭が開催中ですよ！なんといっても目玉はターミナルマスコットキャラ“ター棒”です！可愛いですね☆』

「モザイクかかっちゃってんじゃねーかぁ！分かんねーよ！可愛いさ伝わんねーから！醜態しか伝わってこねーから！金〇にしか見えねーんだけどぉぉ！」

「すごい盛り上がりらしいですよ。ターミナル」

「んなこと知るかよ。俺にはかんけーないね」

『明後日には、様々な星の皇子がいらっしゃるそうで、あのバカ…
ハタ皇子も久々に地球に帰ってくるとか！さらに！さらに！かつて、
公に姿を現さなかったあの江戸城の上様も足を運ぶとの噂も』

「バカってまた完全に言っちゃいましたね」

「帰ってくんなよ…あのバカ皇子……つーかさ、公に姿出しまくっ
てるからね…上様。姿だけでなく俺達には前に醜態までもさらして
るからね！上様！」

「明後日は真撰組大忙しですね～。ターミナルと上様の護衛で引っ張りだこじゃないですか？」

「へんっ！いい気味だぜ！！」

「それにしても……ターミナルが建って…１０年も経ってたとはな」

「銀さん…建設当初を覚えてますか？」

「あ？お前らまだ生まれて…」

「ないですね。たぶん神楽ちゃんも」

「っつても俺もほとんど覚えてねーわ…まじまじと眺められるようになったときにゃ…ほとんど完成形だったからな」

「えっと…攘夷戦争中のときには……」

「……そんなもん造ってるなんて知る由もなかったな…少なくとも俺は。」

「定春ぅぅぅ！静かにするアルぅぅぅ！！！」

「うるせーんだよ！さっきから！！今ちょっと銀さん真面目だったんだよ！？雰囲気ぶち壊すなよな！もういいから寝ろ！」

―真撰組―

「皆は分かっているとおり、明後日はターミナル１０周年感謝祭の警備と、上様護衛が重なっている。真撰組も二手に分かれ任務を遂行してもらうこととなった。トシ。」

「ああ。…今から班を発表する！十隊あるわけだが、奇数の１、３、５、７、９隊はターミナル警備、偶数の２、４、６、８、１０隊は上様護衛にあたってもらうことにする！俺と近藤さんはなるべく両方に顔だそうと思ってはいるが、基本は上様に付くことになる。…総悟、ターミナル警備はお前が指揮をとれ。」

「分かりやした」

「伝達の際はパトカーの無線を使うが、内密の場合は山崎の走らせる！」

「了解です。」

「確かに、任務やる上で数は厳しいものがあるが…ここを越えたら、真撰組の株はかなり上がる！心して任務にあたれ！」

はい！！

「近藤さん、最後に何かあるか？」

「うむ。みな、真撰組大仕事だ！抜かりなく、隊総出で行くぞ！！」

おおぉぉ！！！

「以上だ。解散！」

「トシ、明後日頼むぞ」

「ああ。久々の大仕事なんだ…ヘマは許されねぇ。…しっかりしろよ！総悟、ターミナル警備は全部お前が指揮とるんだからな。」

「嫌だなぁ～土方さん。俺がヘマすると思ってんですかぃ？失礼しちゃうなぁ」

「不安極まりねーわ！」

「トシ」

「なんだ?近藤さん」

「真剣な話…本当に明後日は俺達も心してかかった方がいい…と思う」

「まぁ、殿様いるわけですしねぇ～」

「いや……それだけでなく……なにか、不吉な予感がする。何か起こりそうな予感だ」

「「？？」」

「何かって…なんですかぃ？近藤さん」

「分からん。単なる勘だ」

「……。」

「……ゴリラの勘ってヤツですかぃ…」

「ゴリ…って…え？」

「総悟ぉぉぉ！！」

―とあるアパート―

「姉さん…狛子が…」

「ん？なによ」

「狛子がなんか落ち着かないわ」

「……本当ね。物静かな狛子ちゃんが珍しいわね」

「定春ちゃんに何かあったのかしら？」

「確かめてみないことは何とも言えないわ。百音、明日午前中に万事屋に電話してみなさいよ」

「姉さんしてください。私明日忙しいの」

「引きこもりが何に忙しいんだぁぁぁ！」

夜に黒猫が横切ると縁起が悪い　弐

―翌朝の万事屋―

ＴＲＲＲ…ＴＲＲＲ…

「はい。万事屋銀ちゃんです」

『あ・あたし達。狛神神社の巫女の阿音』

「え?!お、お久しぶりです!新八です」

『どうも。銀さんいる?』

「はい。いま代わります」

「なんだよ朝っぱらから」

『ちょっと気になることがあるのよ。あなた達のとこの定春……最近変わったことない？』

「あ？べっつに……あ・そういや落ち着きねーな。ここ何日か…うるせーったらねーよ」

『やっぱり』

「なんだよ。やっぱりってなんかあんのか？」

『実はうちの狛子ちゃんもずっと落ち着きないのよ』

「狛子ちゃん？……ああ。定春のちっこい奴か」

『狛神が何かに反応しているのよ』

「何かって、何よ？」

『狛神は、地球の大地の流れ“龍脈”を感知し、噴出する“龍穴”を守護する神よ。しかも私達がかつて守護していたのは今のターミナル付近。定春ちゃん達は、ターミナル付近に何か異変を感知しているとしか考えられないわ』

「ターミナルって１０周年記念で、明日その祭があんだろ？そのせいじゃねーの？」

『可能性はあるわね。もしくは、明日の感謝祭。……何か良くないことが起こるのかも』

「……。」

『お偉いさん方来るみたいだし……。狛神達は、ターミナル付近に警告を出していることも』

「だーからって俺達には何にも出来ねーよ」

『……そうね。なるべく明日は定春ちゃん、ターミナルには近付かせないようにして頂戴。』

「心配しなくともあんな人ごった返してるとこ誰も行かねーよ…」

『ならいいわ。定春ちゃんに何か異変あったら連絡して』

「おう」

ツー…ツー…ツー

「阿音さん、なんて言ってました？銀さん。」

「訳わかんねー話だったよ。明日は定春をターミナル付近に行かせるなとよ」

「え？な、なんで？！」

「知るか」

――――――――――――

「銀ちゃーん。お休み～」

「おう」

ダンダン…

「??誰だよ…こんな夜に」

ダンダン……

「はいはい…万事屋銀ちゃん閉店だよ〜また明日来てね〜」

「俺だ」

「んだよヅラか」

「ヅラじゃない桂だ」

「何のようだよ。依頼なら明日にしろ」

「違う、話がある…飲み屋で構わん。少し付き合え」

「？？」

―――――――――――――

「で？なんだよ話って、お前と飲むなんざ気持ち悪りぃな……」

「…先ほど……坂本に会ってきた…」

「辰馬に？」

「ああ。それで……辰馬の船に……あいつが来たらしい」

「あいつ？」

「高杉だ」

「？！」

「少し…話をしたそうだ」

「高杉が話を？…あんのヤロウ、俺達と話しねーくせにあのバカ辰馬とは話したのかよ！」

「まぁ…辰馬はあんな奴だが、中間者ではあるからな」

「中間？」

「江戸全てを破壊せんともくろむ高杉…その江戸に住む俺達…宇宙(そら)に貿易社を展開する坂本は、ある意味俺達の中間者だ」

「……まあな…けど、辰馬は天人とも貿易交わしてるだろ。高杉そこはいいのかよ！」

「うむ……俺なりに…考えてみたが…高杉は、天人と付き合う人間が許さないのではなく……そうさせた“世の中”が許さないのだろう。天人と付き合うのが許せないとすれば、春雨と手を組んだ高杉は行動が矛盾している」

「“世の中”って、幕府か？」

「何を言ってる銀時…このご時世、幕府の力など意味を成していな

いことは知っておろう」

「じゃあいつは、“何が”そんなに許さねーんだよ」

「……かつては俺も、高杉同様、過激派な攘夷浪士と言っても過言ではない。爆弾片手に、隙あらば、天人の傘下と変わり果ててしまったのこの国を更地に変えようと……だが、お前に会い、この“江戸”に住むことを選んだお前を生き様を見て、『あぁ…そうか…そういう生き方もあるのか…』と思った。きっと、俺自身…戦が終わり、この江戸に、カラダもココロも付いていかず、置いてきぼりをくらう己に嫌気と焦りがさしたのかもしれん……目を閉じ、耳を塞ぎ、この江戸を憎むことでしか己を生かすことが出来なかったのかもしれん。」

「……。」

「銀時…坂本が言っていた……“明日”だと」

「……。」

「明日、高杉が来る」

「……。」

「お前は……どうする、銀時。」

「あの時てめぇもいったじゃねーか。『全力で、あいつをぶった斬る』ってよ」

「……あぁ。そうだったな……」

「……。」

「朝向かえに行く。明日は1日…行動をともにしていようぞ。」

「……そうだな…」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1253y/

こんな最終回だったらいいのになぁ〜〜

2011年11月17日21時38分発行